
童話の国のアリス

蒼音 夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

童話の国のアリス

【Nコード】

N8745H

【作者名】

蒼音 夜

【あらすじ】

>>アリス、アリス私のアリス。帰ってきて欲しいのよ、貴方に
——<<“紅く染まった不思議の国”それはアリスの遠い昔の
封印したはずの記憶。アリスの大切な物を奪われてしまった、あの
時の記憶。全てを赤に染めたあの時の。その記憶を消し、安全な場所
で過ごしていたはずのアリスはまだ物語は終わってなかったことを
知る……………

第一章序章 悪夢

第一章序章 悪夢

・・・ふふふ。

私のこと、覚えているかしら。

ねえ、アリス？

まさか私のことを

忘れてしまったのではないでしょうね？

忘れてたのなら、もう一度思い出させてあげるわ。

私は貴女の全てを奪った者であり、貴女の所持者よ。

貴女にとっては、悪夢のような“三日間”を

貴女はそう簡単に忘れられるものかしら。

私だったら忘れられないわね。

“あの世界”を捨てて、一人のうのうと生きている時でも、ね。

アリスったら、私が話しかけても私に見向きもしないんですもの。
本当にひどい子よね、全く貴女を育てた親の顔が見てみたいものだわ。

私が貴女を好きだから、

貴女を殺さなかったっていうことを理解してもらいたいものよ。

私の能力じゃ、貴女は太刀打ちできないのだから。

まあ、貴女を失ったこの世界は、破滅に少しずつ向かっているわ。

そろそろ、貴女の今いる世界から一つ大切な物語が抜け落ちることになる。

そして貴女が好きで好きでたまらない、大切な仲間達もね。

私の知るところではないけれど。

この物語の主人公である貴女もそれに伴い、消えてゆくはずよ。
だけど、そんなことはさせてあげない。

この物語と共に消えるなんて、許さないわ。

そして私の手が届かない場所に逃げた、
貴女には一生死ぬことができない苦しみを味わせてあげる。

そうなるとても面白いわね。

仲間も誰もいない世界で、独りで生きるのはどんな感じなのかしら。
ぜひ私も味わってみたいけれどその権利は貴女に渡してあげるわ。

私からの一足早いプレゼントよ、喜ばなさい。

それとも、私を止めに戻ってこられる？
でもぬけぬけと戻ってきた貴女を見て、大切な仲間達は何て思うかしら。

ふふふ、とても面白いわね。

壊れてゆく童話と、信頼を失くしたアリス、そして傷付いた貴女の仲間達。

それでは、もうすぐ白兎が目覚めるから。

私はここでさよならね。

アリス、貴女がさらにこの物語を面白くしてくれるのを待っているわ。

第一話 忌々しい過去

「……………つくそ!! あいつめ、つい到这里まで来たか……」

疲れたのか、ベッドの上で横になっていたら寝てしまっていたらしい。

そして寝方が悪かったのか、あの忌々しい女の夢を見た。

きつとこの場所がばれてしまったんだろう。

あいつには何人かの手下がいたはずだ。

あの女的能力までとはいえないが、やけに強い手下だった。

……………思い出したくもない、記憶だ。

あの“三日間”のせいで、俺はあの世界から逃げることになった。

何もかもとは言わないが、ほとんどが俺のせいだ。

いや、やっぱり全部俺のせいだな。

俺が何て言おうが、言い訳にしかない。

一人、登場人物を失ったのも。

皆が俺を守るために、傷付いたのも。

何もかも全部。

戻りたくないと言えば、嘘になる。

あの世界で過ごした、時間が一番楽しかった。

しかし……あの忌わしい女が来たせいで、変わった。

黒のドレスに身を包み、肌はどちらかという和白い。

どこの童話の主人公だか知らないが、俺が知らない物語の奴だ。
有名どころの主人公だったら、俺は大体知っている。

……そんなことはどうでもいい。

ただ、あの女には名前がなかった。

名前となるようなものは何も。

どうしてだかは知らない。

が、それはきつとあの世界を襲った理由に繋がっている。

そんな気はするが、俺にはあの女が何で俺を狙うのかは分からない。

頭脳派の白雪でもいれば、話は別だが。

でもこの世界に来るには魔女にでも助けてもらわないと無理だろ。

俺だって、無理やりこっちに来たんだから。

しかし戻りたくはないとはいえ、あの女が俺の居場所を知った今、
あの女が何をしでかすかは分からない。

天使のように純粹で、悪魔のように狡猾。

天使の顔をした悪魔とは、あの女のことだろう。

それに俺が来ないと知れば、あの女はどうにかしてでも俺を来させようとするだろう。

まるでどこかの、わがままな女王様のように。

……でもどうすれば良いんだ。

俺があの世界に戻ったとしても、あいつらは何て言うんだろう。

アイツを殺して、“不思議の国のアリス”という物語を狂わせたのは、俺。

皆はきつと俺のことをもう、仲間だとは思っていないだろう。全てを狂わせたのは俺なのだから。

けど、少なくとも俺を導くアイツが居なければ、俺は何も出来ない。普通にここに生まれて、普通に暮らしたかった。

童話なんて、滅んでしまえば良い……。

「ついに俺もあの女に狂わされてきているんだな……。」

あの女の最終目的は俺を自分のものにする、ただそれだけ。

だから別に俺以外の奴等なんて、興味が無い。

つまり……どんなに人を殺しても、どんなに手を汚しても何も感じない。

そういう女だ、あの女は。

しかしあの女を消してしまえば、全ては元に戻り、壊れた童話も修復する。

このままじゃ童話は壊れ、子供達に影響を及ぼす。

「それだけじゃ、無いんだよな・・・」

そう、まだある。昔誰かが言っていた。

ワールド・オブ・フェアリーテイル

童話の世界がもしも壊れて消えてしまえば、人間界、つまりこの人間達が暮らしているこの世界にも悪影響が及ぶ。

ワールド・オブ・フェアリーテイル

童話の世界と人間界は、平行に並ぶ世界だ。

だからお互いに影響を与えることは出来るが、行き来は出来ない。

ワールド・オブ・フェアリーテイル

だけど童話の世界と人間界は、依存しあっている。

つまりどちらかが狂ってしまうと、狂っていない世界の方まで狂うことになってしまう。

面倒すぎる世界だ。

でも結局俺が最初に、狂わせた張本人だ。

本当にどうすれば良いんだろう。俺が悪いのは分かってるけど、何も出来ない。

「これじゃあまるで、もうあきらめたみたいだな・・・」

俺らしく無い溜息について、ふと顔を上げた。
目をやった其処には。

この世には無いはずの、墨のような真っ黒い、薔薇。

あの忌々しい女が持っていた、薔薇。

忌々しい過去

どっちにしろ、俺にはもうまともな未来はない。
だったら、俺は・・・・。

第二話 訪問者

墨のように真っ黒な、薔薇。

人間界にあるはずのないそれは、あの女の持ち物だ。

いつも俺たちの前に現れるときには持っていた。

どうやら、それが何かを表しているらしい。

過去を思い出したいくない俺にとっては、忌々しいものだ。

でもこの薔薇は偽物なんかじゃない。

今でも昨日のように思い出せる、あの記憶と全く同じものだ。

やっぱりあの女が、ここに来たんだな。

この薔薇が俺の部屋にあること自体が、その証拠だ。

それに俺の部屋に花という花は、何一つ置いていない。

もう一人アパートに住む蓮ぴょんっていう奴はいるが、男だし。別に花なんかに興味はないだろう。

今まで花が好きのような素振りは見せたことがないしな。

蓮ぴょんは俺の部屋に入るといことはしないだろう。

確か初めて会ったときに、入るなど言っておいたはず。

それに蓮ぴょんは男で、俺は一応女だしな。

さすがに何にもしないはずだ。

一旦そこで思考を区切り、部屋を見渡す。

しかしその薔薇以外には何も変わったところがない。

どこから、俺の部屋に入ったんだ。

いや、待てよ………。

もしかして、あいつはあの扉を使って入ってきたんじゃないか。

あの扉を使えるのは、俺と魔女しかないが、あの女なら無理やりでも入れるかもしれない。

……そういえばあの扉のそばに、蓮びよんの部屋がある。

やっぱりあの扉のそばには、俺がいた方が良かったか。

あいつは何にも、童話には関係がない。

だから巻き込むのは、避けなきゃいけない。

普通の奴まで巻き込んで怪我させるとか、そんなことはしたくない。

そうになったら、やることは一つだ。

手早く扉から出て蓮びよんの部屋へと向かう。

俺の部屋は一応二階だから、一階の部屋に行くために階段を下りないといけない。

部屋を隣同士にしておけば良かったと後悔しても、遅い。

後悔するのは、いつだって誰かが大変な目に遭ったときだ。

「うわあああああ」

蓮びよんの叫び声がした。

いっそう、階段を下りる足が速くなる。

最後の三段は飛び降りて、蓮びよんの部屋まで本気で走る。

10メートル・・・5メートル、3メートル、2メートル・・・届け。

蓮びよんの部屋の扉のノブを、掴んで無理やり開けた。

非常事態のときぐらいは、勝手に部屋に入っても良いだろう。
後で蓮びよんに謝れば、良いんだし。

「おい、蓮びよん大丈夫・・・・・・・・か」

一瞬言葉を失った。

目の前に広がるのは、あの女に襲われている蓮びよんとかではなく。
蓮びよんが俺の知り合いの下敷きになっているという・・・・・・。

「ねえねえ、君さアリスちゃん知らない？あたし今その人探してる
んだけど」

「・・・そ、こに・・・・・・・・いま、すけ・・・・ど」

半分以上死にそうな蓮びよんが、正直に白雪の問いに答えて俺のいる方に指を差す。

すると馬鹿な顔をした、白雪の奴が俺を見つけて手を振った。

「ん、あれれ？アリスちゃんこんなところにいたよ！
扉から出たけど、アリスちゃんどこにいるか分からなくてさ。久しぶり！」

相変わらず馬鹿な奴だと思いながら、俺は蓮ぴょんを見た。
蓮ぴょんの顔が半分どころじゃなく、かなり死んでいる。

「ちょっ……あ、りす……さん。とりあえず、この人……
……退けて、くださ……」

いつになっても上から退こうとしない、白雪に掠れ声で訴える。
が、白雪は聞こえていないのか俺の方を見てやけにニコニコしている。

「白雪、とりあえず下見ろ」

「ん？あああ！！ごめんね、ごめんね。悪気はなかったんだけど、
ごめんね？」

とりあえず大丈夫？あわわわわ……」

「ちょ、もう……無理、かもしれ……ませ」

そう言いながら、白雪は蓮ぴょんをがくがく揺らしている。
そんなことしたら、死ぬだろ……。
さっきまで白雪の下敷きになってたんだから。

つうかどうしてこいつが俺のところに、来たんだ……。
やっぱり俺を童話の世界に、呼び寄せる……ためか。

訪問者

いくら俺があゝの過去を忘れたくても、世界はそうさせてくれないよ
うだな。

それはやっぱり俺への、罪と罰か。

第三話 聞きたくなかった言葉

白雪の奴を黙らせて、蓮ぴよんを助けたところで、俺が話をしようとした。

しかし、やっぱり馬鹿なこいつには敵わなかった。

俺が蓮ぴよんって呼んでいるのを聞いて、自己紹介を始めやがった。
蓮ぴよんは ワールド・オブ・フェアリーテイル 童話の世界には関係ないのに。

これ以上俺たちの世界に、関係させたら蓮ぴよんが危険になる。

「君が、蓮くんって言うの？」

「あっはい。蓮って言います。よろしくお願いします」

さっきよりトーンを抑えた白雪の声に、蓮ぴよんが真面目に返す。
白雪はどうしてか律儀に椅子の上で、落ち着いて座っている。

蓮ぴよんの真似なんかなくていいのに。

「こちらこそ、よろしくね。あたしの名前は、ヴァイス。確かね、白っていう意味なんだ」

「そうなんですか。でも、ありすさんは白雪って………?」

「そこまでにしろ、白雪。俺に話があるんだろ？」

蓮ぴよんが、俺たちの世界に関係しないために、会話を区切った。さすがにそこまで、知ってしまうと戻れなくなる。

「うんそうだよ、アリスちゃんにね用事があるんだ。

魔女さんと、後誰だっけ？誰かに頼まれてきたんだ」

相変わらず俺の会話を止めた意味を知らずに、白雪は話す。知らなくて良いんだ、蓮ぴよんには。

俺のやったこととか、ワールド・オブ・フェアリーテイル 童話の世界のことなんて。

「確かね、アリスちゃんに戻ってきてほしいって言ってたんだよ」

やっぱり。

てゆうか言うと思っていた。

じゃないと、ここには来ないだろう。

わざわざ面倒臭がりな、白雪が。

それに魔女も魔法なんか使わないだろう。

変なことのために。

「……………どこに、戻るんですか？」

思考は遮られた。

蓮ぴよんの何も知らないような、問いによって。

「んとね、ここは人間界っていう世界でしょ？で、この人間界の隣にも世界があるの」

「・・・・・・・・そうなんですか」

「うん、それでね。その世界にも名前があって」

分かってないらしい。

蓮ぴょんはこの童話の登場人物でもない。

ただの、人間だ。

「白雪」

「何かあった？で、戻る気になった？あんまり長居はするなって言われているの」

「・・・・・・・・それは」

長居は確かにしない方が良い。

俺は別に大丈夫だが、白雪にはこの世界は慣れない。

・・・・・・・・戻れない。

戻りたくない。

それは、俺の単なるわがままだとも分かってる。

だけど・・・・・・・・。

答えを濁らせた俺を見ると、白雪は蓮ぴょんの方に向いた。

「でしょ？だからね、蓮くんに説明だけしておこうと思って」

「は？こいつは、ただの……」

「違うよ。アリスちゃんが、知らないだけ。魔女さんが言ってたよ？」

いつもみたいな馬鹿な白雪とは違う。

まるでもう一人の白雪のように、まっすぐな目線が俺を貫く。

まさか、蓮びょんが童話に関係するのか？

「嘘だろ、そんなわけがない」

「ううん、それはアリスちゃんの偏った考えだよ」

蓮くんは・・・完璧童話の登場人物だよ。

白雪は最後に、そう締めくくった。

聞きたくなかった言葉

どうして、この世界は俺に恨みでもあるのか。

巻き込みたくない蓮びょんを救うことすら、俺には出来ないのか。

第四話 覚悟

「嘘じゃないのか、それは」

「ううん、アリスちゃんは本当にあの人が好きなんだね。蓮くんはとても似てるんだよ。」

アリスちゃんも分かってたんでしょ？蓮くんは・・・・・・・・」

「黙れ、白雪」

止まらなかった。

気付けば、白雪を大声で怒鳴っていた。

聞きたくない。

蓮ぴよんがあの人に似てる、だなんて。

そんなのきつと、気のせいだ。

別に蓮ぴよんがあの人に似てるから、蓮ぴよんと仲良くなったわけじゃない。

蓮ぴよんに何かを感じたんだ。

惹かれる何かが。

（それは、言い訳じゃないのか）

誰かが耳元で囁いた。

「ありすさん・・・」

不安そうに蓮ぴょんが声を出した。

顔を見れば、俺の顔色を窺うように見られた。

当たり前だ。

大声を出して、怒鳴ってしまったのだから。
きっと俺が怖いのだろう。

（アリス、そういうときは深呼吸をしてください。落ち着きますよ）

いつかのあの人が、言ってくれた言葉が頭の中で甦った。
とても懐かしくて温かくて・・・。

「悪い、感情的になった。白雪、言いすぎた。ごめん」

白雪の目を見て、正直に言う。

なぜだか、あの人の言葉を思い出したおかげで落ち着けた。

「うん、大丈夫だよ。ちょっと怖かったけど、アリスちゃんが謝ってるんだったら、良いよ」

「さすがに言いすぎた。思い出したくない、思い出について言われて、それに」

今ばかりは、白雪の馬鹿さと優しさに泣きたくなった。
どんなに俺が悪くても、白雪は気にしないでいてくれる。

それはまるで・・・あの人のような。

「でも良かった。もう少しで、シュヴァルツを出そうかなと思っちゃったもん」

ね、蓮くん？と明るい笑顔で言う白雪につられたのか、蓮ぴょんもようやく笑顔になった。

「で・・・あの、シュヴァルツって誰なんですか？」

蓮ぴょんがまた、静かに聞いた。

本当は関わらせたくないけど、しょうがない。

白雪が言うのならば、俺は覚悟を決める。

「とりあえず、最初から説明しなきゃね」

「ああ、そうだな。蓮ぴょんには、全部説明してやるよ」

「・・・だけどっ・・・ああ、もう時間みたい。疲れちゃった、あとはシュヴァルツに任せるね」

白雪がずっと表でいたからか、疲れたような表情をしている。きっと姉が疲れたから、妹が代わってあげたんだろう。本当に姉思いの妹だな。

さすが、シスコンのシュヴァルツだ。

「・・・・・・・・貴方が蓮ね。よろしく、私がシュヴァルツ」

声のトーンが変わった。

高く明るい声から、低めで暗い声に。

「え、あの・・・貴方は？」

「ああ俺が説明してやる。少し長くなるけど、良いよな？」

そう言うと、蓮びよんは真面目な顔をして頷く。

こういう空気が読めるところは良いと思う。

覚悟

俺は変わってやるよ。

蓮びよんを守る、騎士になってやる。

俺が関わらせてしまったようなもんだから。

第五話 向こうの世界

「とりあえず、どこから話すんだ？白雪」

蓮ぴよんに話すことはもう覚悟した。

あの過去だけは、誰にも触れられたくはないけど。

でも、前に進まないといけないのかもしれない。

過去に囚われたままじゃ、前には進めない。

そう誰かに言われた気がする。

「・・・
ワールド・オブ・フェアリーテイル
童話の世界から」

静かな落ち着いた声音で白雪は呟く。

いつでもこっちの白雪は、落ち着いている。

感情に囚われずに、まるで第三者のように冷静だ。

そこだけは、見習いたいものだな。

「えーと、
ワールド・オブ・フェアリーテイル
童話の世界という世界がある」

「はあ・・・」

やっぱり世界の名前を言っても、蓮ぴよんは困っている。
そりゃあそうだ。

こんなこといきなり言うなんて、どうかしてる。
だけど説明が下手な俺にはどうすることも出来ない。

だからと言って、白雪に説明させるのも余計話を混乱させる。

しょうがなく俺が話さなきゃいけない。

ワールド・オブ・フェアリーテイル
童話の世界は人間界の隣に位置している。

人間界と 童話の世界はお互いに干渉しあっている。

人間界にある童話というものは全て ワールド・オブ・フェアリーテイル 童話の世界にある。

ワールド・オブ・フェアリーテイル
童話の世界が出来たわけは、

諸説あるが一番分かりやすいのは、人間が創ったという説だ。

人間達が創る童話が、命を吹き込まれてそして別世界にそれが全て集まったというような。

所詮想像にしか過ぎない、説だけでもな。

ワールド・オブ・フェアリーテイル
童話の世界には、たくさんの国がある。
ワンダーランド
有名なもので“不思議の国”などだ。

他にもたくさんの国がある。

それらは全て一つの童話と同じ世界だ。

例えば“人魚の国”は、童話人魚姫と全く一緒になっている。

そして、白雪は“小人の国”の主人公。

白く美しい肌で、黒い髪の白雪姫だ。

とは言っても、それはただの役名だけだな。

明るくて馬鹿な方が、表の人格“ヴァイス”

暗くて静かな方が、裏の人格“シュヴァルツ”

そして俺の住んでいた世界 ワンダーランド “不思議の国”。

俺は色々あって、役名がそのまんま名前になっているけど。

最後に一つ。

ワールド・オブ・フェアリーテイル

童話の世界は、人間界とは関わることは出来ない。

しかし俺と白雪はこうして関わっている。

ワールド・オブ・フェアリーテイル

それは、それぞれ 童話の世界の住人には能力が備わっている。

俺は“形のないものを壊すだけの能力”。

主に空間、時とかなら壊せる。

そういうものだったら、俺は簡単に壊せる。

だから、俺はこっちの人間界に来れた。

蓮びよんの隣にある、誰も使っていない鍵の閉まった部屋。

そこに俺達の世界と人間界を繋ぐ、扉がある。

その扉から俺達の世界へ、行けるようになっている。

白雪もそれを使って、こっちに來たんだ。

あっちに行けば、そういう能力を持った奴らがたくさんいる。

ワールド・オブ・フェアリーテイル

蓮びよんも一応 童話の世界の住人らしいから、大丈夫だとは思っ
けどな。

そこで一旦話を区切る。

きっと色々たくさんのことを詰め込んだせいで、蓮ぴよんが疲れる
と思ったから。

「……………終わった？」

「まあ大体、世界については」

「早く行く」

向こうの世界

さあここからどうなるかは分からない。

蓮ぴよんを無事に、この人間界に戻させるのが一番の俺の役目。

そのためには、あの忌わしい女とだって戦ってやるよ。

第六話 ひとつの願いを

「もう時間」

時計も見ずに、白雪は静かに立ち上がった。

その立ち方はまさにお姫様で、確かにお姫様と言われるだけのことはある。

俺には、真似できない芸当だ。

「しょうがない・・・・・・行くか。蓮ぴょんも着いてこい」

「あ、あの・・・ありすさん」

俺も白雪に続いて、立ち上がると後ろで椅子にまだ座っている蓮ぴょんを見下ろした。

ちよこんと椅子に座っていると、女の子みたいだなと思ったのは内緒で。

しかし蓮ぴょんはその場から動こうとはしない。

やっぱいいきなりこんなこと言われても、困るよな。

・・・だけど、白雪もああ言ってるんだし、とりあえずは着いていかないといけない。

「何だ？何か言いたいこともあるか？」

「……………蓮ぴよんは、止めて下さい」

あの、シリアスな空気が駄目になります。

そうやけに神妙な顔で言うと、椅子から立ち上がった。

……………シリアスな感じで、真面目に言われるとさすがに傷付く。

そう思いながらも、蓮ぴよんに着いていく。

別に何と言われても俺が付けたあだ名なんだし、まあ良いだろう。

いつも言ってるあだ名なんだし。

それに俺だって、シリアスな空気とギャグの空気ぐらいなら読める。本当にシリアスな空気だったら、ちゃんと蓮って呼んでやるよ。

「遅い」

のんびりと歩いてゆくと、もうすでに例の扉の前に着いていた白雪が短く吐いた。

別にのんびり歩いていたが、どうせ隣の部屋だからそう何分もかかっていないはず。

少し白雪が何かに追われている気がした。

いつも無表情だから怒っているんだか別に何も思っていないんだか。その心の中は全く分からないが。

「ああ悪いな。まあ良いじゃねえか」

「すみません」

俺がいつもの通りに白雪に返すのとは真逆で、ちゃんと蓮ぴよんは謝った。

性格的にも蓮ぴよんとは真反対だ。

性別も実際、逆の方が良いんじゃないかとは思うことはあるが、気にしない。

俺は俺だし、蓮ぴよんは蓮ぴよんだ。

「アリス、先。お願い」

「どうしてだ？俺は、蓮ぴよんと・・・・・・・・」

白雪が先に行けって言っているのは分かる。

蓮ぴよんからのじとつとした目線は軽くスルーしながら。

「過去。見せなきゃ」

「・・・・・・・・見せる、意味は・・・・・・・・あるのか」

・・・・・・・・。

正直言って、あの過去を見せられたら俺は蓮ぴよんからの信頼を失くしそうだ。

かっこいい俺ではなく、ただかっこ悪い俺しかない。

「思い出す。蓮は生まれ変わり。白兔の」

ああ。

過去を見せれば、白兎の生まれ変わりである蓮が思い出すはずって
いうことか。

不思議の国のアリスには、必要不可欠の存在だから。

もし白兎が俺の前に現れなかったら、俺ことアリスは不思議の国を
訪れなかった。

……つまり、不思議の国のアリスという物語は創られなか
った。

そうなれば、ワールド・オブ・フェアリーテイクンダーランド 童話の世界から不思議の国は消え去る。

もし蓮が白兎の生まれ変わりではなかったら、別の人物を人間界で
探す。

そして生きていくうちに必要ではない記憶が入った蓮は少しの記憶
を失くすだけ。

俺と過ごした、約一年ぐらいの年月の間の記憶を。

それは確実に賭けた。

もし蓮びょんが白兎の生まれ変わりではなかったら、ワンダーランド 不思議の国は
崩壊への道を進めることになる。

そうなれば全てがおしまいだ。

俺や他のやつらは全て消え去ってしまう。

……それであの忌わしい女の思うがままになってしまう。

そんなことにならないためにも。

白雪や魔女が動いている。

・・・でもそれはないと俺は思う。

蓮は確実に白兎の生まれ変わりだろう。

それは俺の勘が告げている。

それに白兎の生まれ変わりじゃなかったら、俺と蓮が会った理由が分からない。

数ヶ月前のある日の、よく雨が降る日に。

傘を持った蓮が、傘を持たない俺に優しく傘を傾けてくれた。

・・・あのときに。

まだ馴れ初めを思い出すのは、まだ早い。

それに俺達は時間に追われている。

早く行って、ワールド・オブ・フェアリーテイル 童話の世界を救わなければいけない。

「さあ行って」

皆が待っている。

白雪は言わなかった言葉が、聞こえた気がした。

「蓮を・・・頼む」

それだけ告げて、蓮の顔は見ずに扉を静かに開ける。

またこの世界に戻ってくるときには、蓮と笑顔で話していますように。

そんな願いを胸の中に隠して。

ひとつの願いを

それが叶えられるように、俺は不思議の国へ戻る。
ワンダーランド
弱い自分のせいで起こったあの“三日間”の惨劇を、自分の手で終わらせるために。

第七話 はじまりは突然に

「蓮を・・・頼む」

いつもとは全く違う静かな声音でありすさんはそう呟いた。
そしてシュヴァルツさんの返事も聞かずに、僕達の方も向かずに。

何の変哲もない普通の扉を開き、扉の向こう側へと。

・・・ありすさんが言うには、ワールド・オブ・フェアリーテイル 童話の世界という別の世界に繋がっているという扉だ。

正直言って、ありすさんやシュヴァルツさんの言うことは分からなかった。

最初は頭がおかしい人たちなのだろうか、なんて真剣に悩んでしまった。

けれどそれにしては、ありすさんもシュヴァルツさんも真面目だ。

そりゃ、不真面目に話されたところでそんな話は誰も信じないと思うけど。

でも僕には到底信じられないことだった。

まだ数ヶ月しか一緒にいないけれど、ありすさんはとても面白くて楽しい人だ。

僕をよくからかって、蓮ぴょんだとか蓮たんだとかれんれんだとか・
・・。

変なあだ名を付けては、ため息を吐く僕の顔を見て笑っている。

はじめに会ったときは驚いたけれど、ありさんは普通だ。

料理は上手いし、ちょっとコスプレとかが好きだけど、本当に普通。
どこにでもいる少し姉御肌でエスっぽい、エプロンドレスを着た年
上の女性。

そんなありさんが実は、ワールド・オブ・フェアリー・タレント・ランド 童話の世界の不思議の国から来た、本物
のアリス。

だなんて一体誰が信じるのだろうか。

「信じなくてもいい」

凜としたまるで空間を揺るがすような、声で思考は遮られた。
もちろんその声の主は、シュヴァルツさんだ。

さっきまでの明るい性格のヴァイスさんと同一人物で、白雪姫だと
いう。

あの継母に殺されそうになって、森に逃げた。

そしてそこで七人の小人と会って、色々あって王子様にキスされて
目覚める話・・・・。だったっけか。

小さな頃に読んだけど、もう内容はほとんど忘れかけている。

でも目の前にいる、この少女が。

ありすさんよりは少し年下で、腰までの黒い髪に桃色の瞳を持つこの少女が。

確かに雪のような白い肌と、腰までの黒い艶やかな髪は童話の白雪姫と似ている。

・・・・・・それでも。

自分の目の前に突然現れたこの少女を、白雪姫だと信じられるだろうか。

「信じなくてもいい」

もう一度僕の思考を遮ったシュヴァルツさんは、同じ言葉を口にした。

「・・・・・・どうして、信じなくていいと言えるのですか」

その言葉に疑問を持った僕はシュヴァルツさんの言葉に即座に返した。

信じなくてもいいのなら、僕は巻き込まれなくてもいいはずだ。ありすさんの過去・・・・だとか、そういう争いごとに。

別に巻き込まれたくないとか、巻き込まれたいとかそういう話ではなくて。

ただありすさんの私情に関わってもいいのだろうか。全く関係ないこの僕が。

「貴方が、関係しているから」

ありすさんの私情に？

まさか、そんなことあるはずがない。

そういえば、シュヴァルツさんが言っていた。

白兎……不思議の国のアリスに出てきたあの兎の生まれ変わりが僕だと。

「ありえないです」

考えていただけなのに、いつのまにか否定の言葉が口から出ていた。無意識だからきつと、本心からだ。

「そう。信じたくなければそれでいい」

「だから……どうして」

「貴方はまぎれもなく白兎の生まれ変わり。その事実是不変である。まるで僕が白兎の生まれ変わりだと、絶対に確信しているかのようだった。」

その言葉に僕は今度こそ言葉を封じられる。

強い、真っ直ぐな、瞳と言葉に。

「だから早く。扉を開けて……アリスが待っている」

はじまりは突然に

一体僕は何を信じて、何をすればいいのだろう。
物語のページはいつの間にか、第二章に差し掛かるところまできていた。

第八話 天国か地獄か

アリスが、待っている。

その扉を開けた先の、世界で。

この今まで普通に生きてきた、まだ二十歳にもならない僕を必要とする人がいる。

そう言うとか何か大げさに聞こえるけど、ありすさんは大真面目に言った。

冗談だと信じたいが、もう現実逃避している暇はなさそうだ。

目の前で扉を一向に開けようとしない僕のことを、シュヴァルツさんが静かに睨んでいる。

そんな気がする。

いや………気がするだけだと信じたいけど。

でも僕がここで行かなければ、ワールド・オブ・フェアリーテイル童話の世界と僕らの世界は崩壊する。つまり僕を含めて、たくさんの人が命を奪われて死んで、そして消えていく。

もちろん世界ごと壊れる訳だから、別に良いのかもしれない。

だけど僕はそんなのを、見捨てるわけにはいかない。

さすがに僕も消えてしまうわけだし、自分のせいで世界を壊すのは嫌だ。

……だから。

気が乗らないとはいえ、僕はしょうがなく扉を開けることにする。すぐにこっちに戻れないかもしれないけど、僕に残された選択肢は一つだけだ。

選ばなければならない。

いくら選びたくないんだとしても。

「……まだ、決まらないの？」

少し疲れたような声で、シュヴァルツさんが呟いた。

どうやらシュヴァルツさんはどちらかというと、気が短いらしい。

性格とは逆なのだろうか。

ってことは、きっとヴァイスさんの方が気が長いのもかもしれない。あの人は絶対に待ち合わせとかに遅れてきそうな人に、見えるけど。

「……遅すぎる、もう良い………実力行使する」

「え、何ですか!？」

シュヴァルツさんは表情一つ変えずに無感情で呟いた。

だけでもしかしたらその無表情の仮面の下に、怒りが隠れているかもしれない。

だけどまだ会ってから間もない僕に、そんなことは分かるはずがない。

ていうか実力行使ってどういうことなんだろう。

「・・・・・・・・目標を確認、実行する」

その瞬間にシュヴァルツさんが、僕の身体を掴み、扉へと一気に近づけさせる。

かと思うといつのまにシュヴァルツさんが開けたのか口を開いた扉が目の前にあった。

もう何が何だか分からない。

気が付けば、目の前には口を開いた扉。

しかも向こう側は見えなくて、ただ薄い白い光があるだけだった。

「ちょっと待っ・・・・・・・・うわああああああ」

ちょっと待ってください、シュヴァルツさん！

そう言おうとしたけど、半分も言わないうちに僕はその光の中へと有無を言わずに突っ込まされた。

どこに行くかも分からないのに。

天国か地獄か

薄い白い光の向こうは、天国か地獄かどっちなんだろう。

僕には分からないけれど、このさっきからする嫌な予感はきつと当たるだろう。

第九話 疑問

時計の音が響いている。

このアパートの持ち主がいなくなった部屋で。

心地良いリズムを奏でながら、静かに。

その中で一人、シュヴァルツはじつと扉を見つめていた。

今さっき蓮と名乗った、白兔の生まれ変わりの存在が吸い込まれていった、扉を。

きつともうすぐ、童話の世界には着くだろう。

そう見当をつけながら、シュヴァルツは時計の音に耳を澄ました。

そしてシュヴァルツは、一人黙考する。

果たして、今私が行ったことで世界は救われるのだろうか、と。

童話の世界は彼女が住む唯一無二の世界である。

だからその世界が無くなってしまえば、彼女は住む場所を失う。

それどころか、童話の住人たちである彼女達は否応なくとも消えなければいけない。

・・・それは他でもない、アリスのせいだ。

しょうがないのかもしれない。

彼女は確かに敵立ち向かおうとした。

自分の住む世界を汚されて、怒るのは当然である。

しかも自分の仲間・・・友達が傷つけられていくのを見ていられるはずもなかった。

だから彼女は大切な彼と共に、敵に向かったのだ。

だが、女神は彼女に微笑まなかった。

彼が彼女を庇って死んだのだ。

それだけじゃない、彼を殺した敵に見逃されたのだ。

彼女が彼の死によって、あまりにも弱体化してしまったから。

だから彼女飽きたのかつまらなくなってしまったのだろう。

そのことに彼女はきつと、今まで保っていた何かを壊されてしまった。

だから彼の死によって、彼女は全てから逃げ出した。

自分が住む世界も、プライドも、何もかもを捨て去って。

彼が死んだことを認めたくなかったから。

彼が死んだのが自分のせいだと責められるのが怖かったから。

彼が死んだから生きていく希望を失ってしまったから。

彼女は何も言わないが、そのどれかのせいで彼女は逃げ出さざるを得なかった。

シュヴァルツには、あまり感情が無かった。

だから強い彼女が、彼が死んだせいで逃げ出すような感情を良く分からなかった。
いくら大切な彼が死んだからと言って、どうして逃げなければなかったのか。

それだけが本当に分からなかった。

そう、彼女が彼に抱いていた、恋愛という特別な感情についてだけは。

家族愛や友情愛、それに近いものでありながら、それらとは別の感情であるそれ。

ヴァイスに聞いたことが、一度あるがそれでも分からなかった。

「えっと恋愛って言うのは・・・

胸がドキドキしたり、落ち込んだりすることなんだよ!？」

シュヴァルツも分かってたら、楽しいのになー」

そうヴァイスは楽しそうに、嬉しそうに言った。

私にもそれだけは分かるのだ。

相手がいるだけで胸が苦しくなったり、何かを言われたりして落ち込んだりする。

そういう具体的な例は分かるのだ。

だけど抽象的な例が分からない。

どうしてそんな想いを抱くのだろう。

いつそんな思いに発展してしまうのか。

どうしても分からなかった。

第九話 疑問

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8745h/>

童話の国のアリス

2011年3月16日10時50分発行